

『弥勒經遊意』の疑問点

伊藤 隆寿

一 問題の所在

二 全体の構成と主眼

三 吉蔵における『弥勒經』の扱い

四 仏滅年時の記述について

五 吉蔵の仏滅等に関する説

六 用語の特徴

七 本書の引用

1 『觀弥勒上生經疏』における引用

2 『三論玄義檢幽集』における引用

八 結語

は詳細な研究もなされていない。しかし随文解釈の義疏と異なり、遊意は一經一論の大要を、自己の見識と立場で簡潔にまとめたものであるから、その点から言えば撰述者の見解、主張が最も端的に述べられているはずであり、決して軽視すべき存在ではない。吉蔵には『華嚴遊意』『涅槃經遊意』『法華遊意』等があるが、法華を除きいずれも義疏は残されていないため重要な資料となっている。

ところが、吉蔵の著作にはすべて、胡吉蔵撰とか沙門吉蔵撰とかの撰者名が題目のあとに付されているが、今取上げる『弥勒經遊意』には不思議とそれが記されていない。⁽²⁾また華嚴及び涅槃の遊意、その他にしても、本論に入る前に、科段を設ける場合は、その第一章に入る前に、必ずその經の由來ここに取上げた『弥勒經遊意』は、嘉祥大師吉蔵の撰述と伝えられているものであるが、吉蔵の著作としては、三論や法華等の註釈書に比すれば小部の付滞的なものとして、從来と、

安遠の『三論宗章疏』には、

弥勒經遊意一卷吉藏述（大正五五・一一三七下）
とあり、『東域伝灯目録』にも、

弥勒成仏經遊意一卷吉藏（同一一五二上）

と記されており、吉藏に『弥勒經』に対する遊意一卷があつたことは知られるが、ただ後者においては、上生經に対する註疏と成仏經（下生經）に対するもの、それに上下両經に対するものの三種に分けて列記しており、吉藏のものは、恐らく羅什訳の『弥勒成仏經』に対する遊意であろうと推察される。

ところで「東域」には注意すべきもう一つの遊意が記されている。つまり均僧正撰『上下両經遊意』一卷がそれである。⁽³⁾ 安遠録では慧均の『大乘四論玄義』は記しているが、この遊意は列していない。両録には約百九十年の年代的な差があるが、安遠の時代までに伝わらず、その後に伝えられたとは考えられぬから、書写伝持の相違に依るものかと思われる。ともかく吉藏には成仏經の遊意が、慧均には上下両經に対する遊意があつたことが知られる。ところが、吉藏と慧均との比較研究を進めていく間に、現在吉藏の著として大藏經に収録されている遊意について、二三の疑問が提示されるに至つた。すなわち吉藏の著作としては問題となる点が見出されたのである。

翻つて、『弥勒經』は晋太安二年（三〇三）に竺法護によつて訳出された『觀弥勒下生經』一卷⁽⁴⁾を始めとして、羅什に『弥勒下生經』と『弥勒成仏經』とがあり、また沮渠京声訳と伝えられる『觀弥勒上生兜率天經』もあつて異訳經が多いが、釈道安の兜率往生の信仰等、弥勒に対する信仰は中国仏教界において根深い。しかし南北朝における本經の研究講説の方は、僧伝に表れている限り散見する程度である。むしろ本經は、教理学説上の面ではなく、信仰の対称として、それを支えるものとして受容され訳出されたものである。したがつて僧伝の記述も、弥勒像の造立とか念誦とか信仰上の記述がほとんどである。釈道安を中心とする門下の人々の信仰はもとより、劉宋では慧玉、梁においては宝亮は下生經を講じたとされ、僧旻、法上、曇衍、僧護⁽⁹⁾などは弥勒信仰の人として伝えられている。隋代には靈裕、靈幹、善胄⁽¹⁰⁾が上げられ、靈裕には上下両經の疏記があつたとされるが伝わらない。また天台大師智顥に『弥勒成仏經疏』五卷があつたことが目録に見えるが、現存のものとしては、この『弥勒經遊意』が最も古いものである。隋唐代には急速に阿彌陀淨土信仰が盛んになり、弥勒信仰は下火の觀を呈するが、この時代にあって本書が著わされていることは注目されよう。

本書は、羅什訳の二經と京声訳の三經、つまり上下両經の遊意であり、以下若干の問題につき考察を加えたい。

二 全体の構成と主眼

本書は、第一序王、第二釈名、第三弁宗体、第四論因果、第五明出世時節久近、第六弁成道、第七明三会度多少不同、第八弁弥勒釈迦同時涅槃不同滅度、第九簡教大小乘、第十明雜料簡の十章に分けられている。

第一序王では、「諸仏の出世は大事因縁の故に」として「初發心不足の地に居し、専ら無所得大乗を覺り諸万行を修するが故に。或は兜率に上りて諸天子の為に般若波羅蜜を説き、或は五十六億七千万才時に闇浮提に下りて乃ち種覺を成す云々」¹³と大意を述べ、弥勒については、「功は十地に等しく、徳は高行を成し、三忍の上忍を逾え、まさに斯の穢土を改め彼の淨国と為す」(大正三八・二六三上)とする。

第二釈名では、「此の經、若し胡音を存すれば、応に仏陀般遮阿那羅弥勒菩薩摩多羅修摩兜率陀提婆修多羅と言うべし。漢には覓者説觀慈氏大心衆生上生知足天經と言うなり」(二六三上)としている。しかるにこの音写と漢名は、恐らく京声訳とされる『仏説觀弥勒上生兜率天經』に依拠して梵音を推定したものであらうと思われる。これと同様の例を他に求めるに、吉藏の『觀無量壽經疏』の序文では、仏陀槃遮阿梨耶阿彌陀仏陀修多羅といい、これを覓者説觀無量壽覓者經と訳している。しかし本文中の經題釈では、阿梨耶ではなく阿

耶羅としておりこれを覓の梵音とする。¹³ この覓の原語が梵語の何に当るかについては不明であり、阿那羅にしても阿耶羅にしても相当するものはないとされる。¹⁴ 那と耶の違いは、あるいは写誤かも知れぬが、慧均の『四論玄義』で、中觀論の梵音を述べて、田地阿那羅優婆提舍としているから、一概に写誤とも言えぬ。また憬興の『弥勒上生經疏』においては、阿那羅とする。¹⁵ また説に當る梵音としては前出の他に『金光明經疏』の冒頭で記しており、『觀無量壽經疏』と同じく槃遮としている。ともかく遊意と他の著作では、覓及び説の梵音を言うのに相違が見られる点を指摘しておく。

次に「今異名を簡ぶに同じからず」として「一に毘留と名づけ亦た闍那迦と名づく。此に成と云う」とするは、成仏經の成を言つたものであろう。吉藏の著作中、これに対比できる記述はないが、慧均は『成實論』の梵音を述べるのに、闍那迦波樓侮優婆提舍とし、「闍那迦亦た毘留と名づけ、此に翻じて成と為す」と説明している。¹⁶ 遊意の説明と同じである。仏陀、修多羅の異名を出し¹⁷ 「今上下生兩經、胡漢兩音と人法二種を擧ぐ」として『釈論』、『賢愚經』等に依り弥勒を説明している。

次の第三弁宗体における解釈が注意される一段で、上生經と下生經とを対比し、中仮を具足するか否かで兩者を判別している点である。すなわち、

第三に宗体を弁ず。一往大判せば、上生經は大乗を以て宗体とし、下生經は小乘を以て宗体とするなり。故に上生經の内に具さに六度四等の菩薩行を証し、亦た具さに中仮詮る。故に大乗の因果等を宗とす。後の第九段中に簡ぶるが如し。下生經は、但だ戒定慧三品三藏を弁ずるのみなるが故に、小乘を宗とす。故に三会說法し四果を証するのみ。亦た但だ仮を説き、中を明さざるが故なり。(二六三下—二六四上)

とし、文中指示するごとく、第九に教の大小を簡ぶ段でも、旧來の教判説を紹介し、『弥勒經』に対する諸師の見解を出して、最後に自説を述べ、前引の主張を再説している。教判説は、吉藏が他の著作において紹介する形と異なり次のようにある。

旧の諸師云く、釈迦の一化、形を現わし教を致すに二途を出でず。一は是れ世教、二は是れ出世教なり。世教を明すに三種有り一には三帰、二には五戒、三には十善なり。二には出世教、亦三種有り。一に頓數。利根大行人の為に説く、華嚴大乗等の經是れなり。二には偏方不定教。中根人の為なり、夫人と金光明等の經是れなり。三には階漸次第教。此れ下根人の為に經を説く、即ち是れ五時と四時等の經教是れなり。(二六九上)

と言うのだが、この從來說は、劉虬の説⁽²⁰⁾及び頓漸不定の三時教等を総合して述べたものであるが、吉藏は『三論玄義』において慧觀の五時教を説明批判するのみであるし、『法華玄

論⁽²²⁾』では五時之説四宗之論といい、慧觀の頓漸二教を出し、

これに後人が無方教を加えて三種教相となしたものと説明し、北土の四宗判は江南の五時判の影響を受けて作られたものという。また『法華遊意』では南方五時説北土四宗論と、同じような表現をして、これについてはかつて説明したので今は述べないとする。吉藏にとって従来の教判説としては南方の頓漸五時と北地の四宗判が代表として上げられ批判の対照となつており、頓漸不定の三種教相として説明するところは見られないし、漸教に五時と四時の二説あることも述べない。

ただし『大品遊意』では成実論師の説として頓漸不定の三種教相を掲げ、しかも漸教中に四時と五時の異説あることも述べている。⁽²³⁾これ全く前引の説明と符合するものであるが、筆者は『大品遊意』に関しても吉藏の真撰か否かにつき疑問を抱いているので、今はこれ以上触れない。ところで慧均においてはどうかと言うに、『四論玄義』の二智義において教判説に触れ、

論師の宗に漸頓偏三種の教有りて同じからず。今漸教に四時と五

時の教有るに就いて二智義を弁ぜん。(正統一・七四・一・七三

右上)

として以下開善寺智藏の説などを紹介しながら解釈を加えている。遊意の説明と相応する。したがつて本書の教判説の記述の仕方は、吉藏の他の著作とは異にするものであり、『大

品遊意』や『四論玄義』に一致する説明であることが指摘されよう。『弥勒經』については、偏方教や次第教中の初教に入れる説、または阿含中に含ましめ、それを小乗とし大乗とする説などを紹介し、これらを否定して、上生經は大乗、上生經は小乗との見解を強調する。

また第七の三会度多少不同を明すところで、『觀弥勒經』の不修禪定不斷煩惱を説明するに際しても、「具さに中仮を論ぜば不修禪定不斷煩惱と言うべけんや。但だ優婆離は小乗の意を執して問うのみ」（二六八中）と判じ、『大品』、『十住断結經』、『大經』、『華嚴經』を引証し、そして發心位の無差別を論じて、

但だ諸論師等の義宗は、發心の位を定めて下とし、仮名を定めて前として、發心は即ち是れ眞の凡夫の位次とせる故に、此の如き判を作すのみ。今發心位を明さば、中仮を具して之を明すが故に即ち齊しきなり。（同二六八下）

としている。以上のごとき、中仮体用兼ね備えることを以て諸説の是非を判別し、自説を主張する態度は、他に見られぬところであり、本書の特徴である。それに、上生經は大乗、下生經は小乗を宗とすると判断するのであるが、それは上下兩經の宗旨を明らかにすることによって、大小乗を包括した中仮具足の根本立場が宣明され得るとの構想である。しかも中と仮とは不離不触であり、不二にして二の関係であるから

宗と体を述べるに於いても究極は不二なるも一応両者異とすれば、正法を体となし、因果を宗とすると結論している。しかば、吉藏の他の著作における『弥勒經』の扱いはどうであろうか。次に『觀無量壽經義疏』により、それを窺つてみたい。

三 吉藏における『弥勒經』の扱い

吉藏は隨文解釈に入る前に序王、簡名、弁宗体、論因果、明淨土、論緣起の六門分別をしているが、その第六論緣起において『觀無量壽經』と『弥勒經』とを比較して述べている。まず初めに、

合せて無量壽觀と弥勒との二經の説を商略す。然るに聖心を考えるに息患を以て主と為す。教意を統べれば開道を以て宗と為す。所以に世に千車轍を共にし万馬案を同じくすと言うなり。如來の出世もまた是の如し。衆生をして同じく一道を悟らしめんと欲す。但し根性は一に非ざるが故に教門に殊致有るなり。所以に此に之の二經有りて兩種の教化を明すなり。（大正三七・二三六上）

と二經の説かれた所以を如來の対機説法の趣旨に帰し、暗に兩經の相違せるを示唆している。しかるに第一に両者の總體的な相違を言うに、無量壽觀は十方の仏化を弁じ、『弥勒經』は三世の仏化を明すとし、前者を横化、後者を豎化とする。理由は、『弥勒經』は堅に過去七仏、現在釈迦、未來弥勒の三

仏化を明すが故であり、無量寿觀は横に此方穢土釈迦の化、西方淨土無量寿の化すなわち十方の仏化を明すからであると大判する。そしてこれを通別に分かち、通の立場からは共に大乗であるといい、それは大乗には具さに十方と三世との仏化を明すから、つまり両者共に大乗中に明すところなるを以つて通じて大乗であると言うのであるという。別の立場では、大乗は具さに二化を明すが故に満字教であり了義とし、小乗は三世仏のみを明し十方の仏化を弁ぜざるが故に半字教であり不了義なりと両者を区別している。つまり『弥勒經』を小乗とし『觀無量壽經』を大乗と判別するものである。そして通の立場からの説明を加えると共に、別の立場としては、縁に約すれば無量寿觀は大乗であり弥勒成仏は小乗であると前置きして種々の角度から解釈している。両經の相違として、『弥勒經』は遠見仏縁・小乗衆生・福德淺薄人のために説かれたものであり、『觀無量壽經』は近見仏縁・大乗衆生・福德深厚人のためと対比させている。

以上の説明に依り、吉藏の本經に対する大よその見解を知るのであるが、大小乗の判別の基準、価値判断等において遊意とは異っていると言えよう。兩經の比較という点からも知れぬが、上生經と下生經とを内容上区別して述べるようなことはせずに、全体的に把握して判断している。あるいは「弥勒は亦た小乗成仏あり大乗の成仏あり」などと言うのは、

下生經と上生經とを言つたものかも知れぬが、吉藏にとつては上下両經の相違などはあまり問題ではなかつたようである。それに吉藏においては大小乗の判別に際し、中仮の具不具などを持出すことは他の著作においても例のないことである。

四 仏滅年時の記述について

次に問題となるのは、十門中第八の、弥勒と釈迦とは同時涅槃不同滅度を弁ずる段の冒頭の記述である。すなわち、尋ぬるに仏は是れ周莊王十年夏四月八日辛卯の夜、恒星の現ぜざる時節、是れ仏の生れたる日なり。仏は是れ惠王八年四月八日出家す。この時年十九なり。惠王十九年四月八日に至つて成道す、この時年三十。匡王五年二月十五日に至り滅度す、この時年八十九なり。（大正三八・二六八上）

とする説である。周の莊王十年は西暦紀元前六八七年であり、仏滅度の匡王五年は紀元前六〇八年に当り、仏滅年代の通説からすれば信憑性はないのであるが、十九出家三十成道八十滅度の区切りからすると、年号はきちんと合つており、本書が著わされた当時の流布説の一つとして認めることが出来る。しかるに、費長房の『歴代三宝紀』の説と年号において全く一致するもので、相違点は、本書が八十才説に対し「三寶紀」は七十九才説になるがために、仏滅度を匡王四年としている点と出生及び成道の月を二月としている点である。⁽²⁵⁾「三寶紀」

の割注において、古来の異説を紹介し典拠を上げているが、恐らく本書の説は年代的に言つても、この「三宝紀」の説を採用したのではないと思われる。そこで、「三宝紀」では、仏滅度より今、すなわち開皇十七年丁巳（西暦五九七年）まで一千二百五年と言つており、年数は合致している。したがつて、本書の先引の文に続く次の記述が問題となるわけである。つまり、

仏自出世從周莊王至契合得一千二百四十年

という一文である。これを大藏經の句点に従つて読んだのは、どうにも意味が通じず、普通に仏自出世の「自」及び從周莊王の「従」をよりと読み、また至契の「至」をいたるまでの意味に取つたのでは一千二百四十年という年数が仏の出世から数えたものなのか、周莊王の時より契に至るまでとすれば、契の字が意味をなさなくなってしまう。梁の写誤かとも思われるが、字体から言つて契と梁との写誤はなかろうと思う。甲本である大谷大学蔵の写本も同じであるから。とすれば、一般に仏滅度後何年という数え方及び『歴代三宝紀』の例からしても、この一千二百四十年というのも、仏滅度より今、つまり本書を著わした時点までの年数を指すと見るべきであろう。したがつて、この一文は次のように読むことが出来る。

仏の出生を（もつて）周の莊王とするに従えば、至契に合して（あるいは至つて契合して）一千二百四十年を得るなり。

と。至は「まことに」とか「大いに、極めて」の意味としての「いたつて」と取るべきであり、至契 zhì qì hé の熟字で「はなはだ一致する」とか「まことに対応する」の意味となる。つまり本書の著者は仏の出世年時を周莊王十年とする説を採用し、それに従えば、仏の滅度すなわち匡王五年より現在に至るまでで丁度一千二百四十年であるとの意味で記したものである。したがつて、仏の出世成道等の年号と年数の合致から考えて、この記述は、端数を省略したとしても、一応正確な数え方をしていると思われ、逆算すると、唐太宗の貞觀七年、西暦六三三年ということになる。すなわち本書が著わされた年時である。

あるいは翻つて仏の出生（周莊王十年）より一千二百四十年との意味に受取り、したがつて契を梁の写誤と考えた場合は、梁の承聖三年、西暦五五四年となるが、これは本書の記述の順序、文脈からしても無理な解釈にならうし、梁末の著述であるなら、本書中に数度用いられる地撰両論成毘二家の義宗とか地撰成毘諸家云とかの用語例は出て来ないと思われるし、真諦訳の『俱舍論』や『立世阿毘曇論』に言及していることからも、梁代とは考えられない。また著作の年時は後代で、年数の数え方だけ梁末で切つたということも不自然である。

したがつて、吉藏の在世年代は西暦五四九年から六二三年であり、本書の記述に従う限りは、いずれにせよ吉藏の著作

可能な年代からは外れるということになる。

五 吉藏の仏滅等に関する説

前節のごとく、本書では釈迦の十九出家三十成道八十滅度説を取るのであるが、第四に因果を論ずるの第三、始終の時節を弁ずるところでも触れ、釈迦の寿命は経論の出すところ同じからずとして、『中本起経』等を引用して次のように述べる。

如来の大期は八十なり。第七十九年に大經を説きたもう。若し爾らば法華に四十余年というは、此れ必ずや大經の所説ならん。更に一年を退いて是れ七十八年に法華を説きたもうなり。若し爾らば八十を以て定とするは、十九出家三十成道を正しく取るなり。（二六六中下）

としている。しかるに吉藏の『法華義疏』卷七では、

旧に云く、如来は三十にして成道し、八十にして滅度す。その間の五十年は説法したもう。この經は涅槃に隣次す。故に寿量品に伽耶に於て成道し、今に至つて四十余年なりと云うと。諸師並に云く、四十九年に法華を説きたまえりと。今明さく、若し法華を説きたもうこと必ず是れ四十九年ならば、則ち仏は十九出家三十成道には非らず。何を以て之を知るとせば、若し十九出家三十成道ならば、則ち出家以後は十二年を経るなり。而るに經及び釈論に云く、城を踰えし夜に羅云を生ずと。若し爾らば何が故に十二年と知るや。又經に皆六年苦行すと言ふ。若し十二年ならば、そ

の間復た何の為す所ぞや。此を以て之を推すに、十九に出家して三十に成道せるにはあらず。若し必ず十九出家なりとせば、即ち二十五年の成道なるべし。寿量品に応に五十余年と言うべし。四十余年とは言うべからざるなり。今釈論に依れば、經を引いて云く、我れ二十九にして出家せりと。若し爾らば、即ち三十五年にして成道せるなり。而るに寿量品に四十余年と云えるは、即ち其の文に会うなり。（大正三四・五五三上）

として、『智度論』等の文を根拠として、二十九出家三十五成道を主張して、寿量品の文を会通している。

また本書では先引の仏の年代を記したあとに、「具さには大經疏中に之を弁ずるが如し」として詳しい説明を譲つているが、南都の注釈書に引用されている吉藏涅槃疏の断簡には相当文は見当らない。⁽²⁶⁾ そして安澄の『中觀論疏記』卷二末では、⁽²⁷⁾ 吉藏の『中觀論疏』卷一末において、仏滅を解釈する異説を列挙する文を説明するのに、「今先に仏の生年並びに成道滅度の年月を定めん。然る後に部執の不同を顕わさん」として、『述義』『歴代三宝紀』、法寶の『俱舍論疏』、『仏祖統記』、また吉藏の『涅槃疏』及び上掲の『法華義疏』の文を引用しながらも、本書の記述には一言も触れておらず、また本書で指示するような内容に相当する「大經疏」の文も引いていない。このことは、安澄が、本書の存在を知らなかつたのか、あるいは吉藏の著作ではないために援引しなかつたの

か。そして少なくとも吉藏の『涅槃疏』には、仏の出生成道等の年月についての記述はなかたものと考えられる。もし吉藏疏中に、本書で示すごとき年代論があるなら、安澄は必ずや引用したであろうと思われるからである。したがって、この点から言つても、本書を吉藏の撰述とすることには疑問が提起される。

六 用語の特徴

次に本書の特徴もしくは吉藏の他の著作との相違点として指摘できるのは、独特的言葉の用い方である。

語法としては、前にも触れたが、先に異解（従來說）を出

して最後に自説を主張する際に用いるところの「具詮中仮」「具論中仮」「具中仮明之」と言つた表現の仕方である。三論

教学における中仮義の重要性はすでに述べたところであり、吉藏も『中觀論疏』等での意義を認め散説するが、自己の基本的立場として強調することはなく、「中と仮とを具足する故に大乗である」等の語法は他にみられない。かかるに『四論玄義』の著者慧均は、自己の根本的立場、論理の依拠するところとして中仮を多用している。例えば、『四論玄義』の二智義では、七方便、四十四智、六十六智等を説明して、

今其の相を窮むれば、此の智は其れ中仮なり。此の十二因縁は浅に之を明きば但だ仮上に明すなり。深なれば則ち無明なるも畢竟

無生無我にして即ち是れ中なり。而も成論等は但だ仮上に之を明すのみにして、中に及ばず、復た性として有（所）得なり。今大乗は、意を明して説けば則ち中仮の觀を具するなり。仮に約して之を明さば六十六智、中に就いて之を明さば十一智、今中仮を明すが故に七十七智なり。（卍統一・七四・一・八三左下）

と述べ、大乗の立場は、中仮共に具足せるを条件とすることを説き、三乘義においては大乗を説明するのに

大乗に亦た二種あり。一には仮の有と不有、仮の無と不無を悟る修万行菩薩の大乗。二には有と不有、無と不無を悟り、円かに中仮を悟る、方には是れ実の大乗なり。亦た前は権大、後は是れ実大と言ふことを得るなり。（卍統一・七四・一・九八右上）

などと言うのがその一例である。

さらに注意されるのは自説を述べるのに「一家義宗」なる言葉を用いていることである。吉藏は、「一家云」とか「三論一家」という言葉はしばしば用いるが「義宗」という語を附することはしない。同様に「地攝兩論成毘二家義宗」なる呼称もそうである。この二つの熟語は、共に『四論玄義』において口癖のように用いられているものであり、吉藏の他の著作には例を見ない慧均獨得の用例である。⁽³⁰⁾

七 本書の引用

1 基『觀弥勒上生經疏』における引用

『弥勒經』に対する註釈は、上述のごとく、本書が現存の

ものとしては最も古く、次が慈恩大師基（六三二一六八二）の『觀弥勒上生兜率天經贊』二卷である。この書は沮渠京声訳出と伝えられる『觀弥勒上生經』に対する註釈であるが隨文解釈に入る前に(1)仏成権実、(2)慈氏所因、(3)時分有殊、(4)往生難易、(5)問答料簡の五門分別をしてある。いわゆる玄論、玄義に当る部分であるが、この中の(2)(3)(5)において本書つまり「遊意」に順じて解釈し、また引用をしている。恐らく當時としては解釈するに当つて参考となる著作も少なかつたのであろうが、引用経論などを見ても、本書に依るところ多かつたものと推察される。次に相当部分を遊意の記述の順序に従つて比較対照すると次のごとくである。

弥勒經遊意

觀弥勒上生經疏

第二釈名：次簡阿逸多与弥勒。
阿逸多此云無能勝。故淨土經云
莫能勝也。弥勒者亦彌帝禮或名
彌帝隸迦也。（中略）賢愚經十二
卷云。弥勒生在波羅捺國劫波利
村輔相之家。初生有三十二相。
身紫磨黃金色。姿容挺特。輔相
歡喜。召相師相之。相師善因爾
立名。則問児生時凡有何相。答
言其母素性不能良善。懷兒以來
慈矜苦見。相師喜言。是児者必

第二慈性所因者依正梵本應云梅
咀利耶。此翻為慈。古云彌帝隸
或云彌勒者皆語訛也。依賢愚經
第十六卷云。生波羅奈國劫波利
村輔相之家。即上生經云。劫波
利村波婆利大婆羅門家。初生便
有三十二相八十隨好。身紫金色
姿容挺特輔相歡喜。召相師相之。
相師既見転讚其善。因欲立名。
方問生時之相。父答之言其母素
性不調。懷子以來慈矜苦厄。相

慈心。因此為立名号曰彌勒。父
母愛重。心無有量。其殊勝名相
相稱。令國土宣伝聞名。波羅捺
國王名梵摩達。聞之心懷懼。恐
奪王位。意欲未長大時方便除之。
其父母知之。遣人遂與其舅。舅
名波婆利。領五百弟子。在異國
學道。舅得彌勒已教學問。學未
滿歲時。則通經書。其舅。後時
聞有佛出世。則遣彌勒等十六人
往至佛所。思念為四句。一問幾
相。二問年壽。三問弟子。四問
經性彌勒問已。如來歡喜答。佛
更開化說法。其十五人則得法眼
淨。各從坐起則索出家。佛言善
來便譬自墮。重以方便為其說法。
十五人成阿羅漢。彌勒七歲發心
而已。彌勒後時從佛還迦維羅國。
大愛道比丘尼為佛自手紡績。作
一端金色縷之疊袈裟。繫心積想。
以奉世尊。世尊不受之。還令供
養衆僧。遂語則供養衆像。衆僧
之中行之。無有欲取。者彌勒前
持鉢巷陌。觀者無厭。雖皆敬歛。
無與食者。有穿珠師。將還供養。

師占曰。此即児志因為立號名梅
咀利耶。若釈此名應云梅咀利曳
尼。梅咀利尼是女聲母性慈故因
名慈氏。父母愛重聲譽。遠聞王
梵摩達。心惱生懼恐奪其國。同
其未長方欲降之。內人既知潛報
父母。私送舅氏避難習業。舅名
波羅利領五百弟子。異方學道。
舅甥師弟聰穎超群。數歲之間學
通經典。舅後聞佛出世。遣慈氏
等一十六人。往至佛所而為四問。
一問幾相。二問年齒。三問弟子。
四問種姓。慈氏問已如來具答。
慈氏歡喜佛因更化余十五人。得
法眼淨。俱從坐起並乞出家。佛
言善來。衣嚴髮落方便更說並成
應果。唯有慈氏不預彼流。後從
世尊遊迦維羅衛國。其大愛道。
手自縷績。金疊袈裟。繫想奉持。
世尊不受。令供養僧。僧中次行
無敢取者。到慈氏所。尋為取之。
身披金疊。從佛遊化。身紫金色
衣。貫金彩表裏相稱。巡行乞食。
則取著之也。時佛過波羅捺國。
身紫磨黃金色。又被金縷織袈裟。

表裏相称。行乞食至大陌上。擎鉢住止。人民見之。視者無有足。

雖皆敬重之。而無有人與食者。

時有一穿珠師。將還家供養。其婦怒言失穿珠師之利共。彌勒則將此師還衆僧。衆僧廣說法供養。世一氈生生世世無貧。亦為說施。彌勒未來果報事也。

(大正三八・二六三上一下)

第三弁始終時節。如賢劫等經云。有三世劫。劫有千仏。過去莊嚴劫千仏。現在賢劫千仏。未來星宿劫千仏。此三千仏。往昔同修行勝因故。次第致果。在乎三劫。又賢劫仏千獨為一類。然賢劫千仏中。前四仏已過。今彌勒是第五仏。當出世興也。

婦來。嗔罵言失穿珠之利。慈氏得珠。持還問衆人。廣說過去供養所生福利仏因無滅。說過去事便說未來慈氏之事。慈氏後作仏故。猶名慈氏。慶喜問仏慈氏名因。仏言過去此瞻部洲有大國王。名達磨流枝。此云法愛。爾時有仏号曰弗沙。有一比丘入慈三昧。身相安靜放光照耀。王問此僧何定致此。仏言入慈定。王倍生欣躍云。此慈定巍巍。乃爾我當習之生生不絕。往法受王者今慈氏。是從彼發意常号慈氏。久習性成仏稱彌勒。

(大正三八・二七五上一中)

第三時分有殊者劫有多種。如別章說。(中略)其初千人者華光仏為首下至毗舍仏。於過去莊嚴劫

天。說法度諸天。不能暫捨身種種苦行也。积迦精進苦行故。超之九劫。得成仏也。

(同二六四中一下)

仏出世不同。如积迦論第九卷云。前九十劫中有三仏出世。後十劫中有千仏。九十劫中初劫有毗婆尸仏。秦言種種見也。第三十二劫中有二仏。一名尸棄仏。秦言火。亦云頂髻。二婢怒婆附仏。秦云一切勝也。第九十一劫。劫無仏出世。第六劫有俱留孫仏。第七劫有俱那含牟尼仏。第八劫

其三千仏復各自類同修勝業。俱時獲果。(中略)

依小乘說。菩薩百劫修相好業。

積迦買五華以供養定光。定光即燃燈也。遂為授記。汝於來世當

時菩薩百劫修業三十二相業自在

也。五華散供養仏故。後九十一劫當作仏。但直明之應百劫滿足

作仏。精進苦行故。超踰九劫。余九十一劫也。若不超者。應在

弥勒後成仏故。經中往往云。弥

勒發心行道在积迦前。但不精進

苦行故。成仏處後。故彌勒自念

言。我千阿僧祇劫。生在兜率陀

能昔時捨身少分。以稽留故在後

成仏。(同二七六上一下)

千阿僧祇劫都史天說法度人。不

能昔時捨身少分。以稽留故在後

成仏。(同二七六上一下)

世尊入火光定。滅光恍曜积迦讚歎。復超九劫故。先彌勒以得菩

提。故經數說。彌勒自言。我寧

作仏。精進苦行故。超踰九劫。

余九十一劫也。若不超者。應在

彌勒後成仏故。經中往往云。弥

勒發心行道在积迦前。但不精進

苦行故。成仏處後。故彌勒自念

言。我千阿僧祇劫。生在兜率陀

天。說法度諸天。不能暫捨身種

種苦行也。积迦精進苦行故。超

之九劫。得成仏也。

(同二六四中一下)

然积迦仏百劫修相好中九十一劫

中第一劫逢毗鉢尸仏。第三十劫

逢尸棄仏。秦言種種見也。第九十一劫

逢賢劫千仏。有云。住劫中初五

劫無仏出世。第六劫有俱留孫仏。

第七劫有俱那含牟尼仏。第八劫

有迦葉仏。第九劫有积迦。第十

嚴劫有千仏出現世間。文皆同此。

初有四仏。一名迦羅鳩浪陀仏。

亦名拘樓孫仏。大論不見翻。崑

崙三藏冠頂亦云帽仏。仏生時如

珠有出也。二名迦那舍牟尼仏。

秦云金仙人。又云屈仙人。三名迦

葉仏。四名枳迦牟尼仏。法四仏

足前三仏。則是七仏。其前三仏

在九十劫中仏也。初仏壽命八万

歲。第二仏壽命七万歲。第三仏

壽命六万歲。余有四仏。在第九

十一劫。劫號為賢劫。初人壽命

數千万歲。漸減漸減。五百万歲

時。有転輪聖王。即出行化。從

爾後稍稍減也。賢劫經云。至四

萬歲時。有第四拘那提仏。亦云

拘樓孫仏。出世五濁。經六萬歲

至三萬歲時。有第五拘那舍牟尼

仏。出世五濁。經云四萬歲也。

二萬歲時。有第六迦葉仏出世。

壽命二萬歲。迦葉仏後漸漸減。

人命至千二百歲時。枳迦始上兜

率天。於天數四千歲。則人間五

十六億七千万歲。人壽命百歲時。

從兜率下。閻浮提作仏。正法五百歲。像法千年。過千五百歲。

賢劫經云。人壽一千二百歲枳迦

始生都史。人壽一百歲出世作仏。

都史天壽四千歲人間當五十六億

七千万歲。正法五百年。像法一千年。不論末法仍云過千五百年

劫有彌勒。有云。四仏並第九劫。

四已出訖。并前即為七仏也。彌勒

當賢劫第五仏也。即是第三時分

有殊。（同二七六下—二七七上）

劫有彌勒。有云。四仏並第九劫。

四已出訖。并前即為七仏也。彌勒

當賢劫第五仏也。即是第三時分

有殊。（同二七六下—二七七上）

劫有彌勒。有云。四仏並第九劫。

四已出訖。并前即為七仏也。彌勒

當賢劫第五仏也。即是第三時分

有殊。（同二七六下—二七七上）

則枳迦法滅盡。別經云末法一万年也。唯有辟支仏行仏也。人命

稍稍轉促至十歲時。三灾競起土地彫荒。諸惡人死盡。國界空疎。相見則相殺。時有仙人出世。名郭相。亦云郭智。勸戒云莫相殺

因緣漸漸促短。勤須修善行慈之故。即復所生子。壽二十歲。如是子復生子。子孫壽四十歲。転

增至百歲一万三萬六萬歲時。有転輪聖王。出世行化。王王相次。經第七時。人壽八万四千歲時。

彌勒仏出興世。于時安樂人民熾盛時下生也。大賢劫經云。慈氏

仏光照四十里。梵志種。父名梵摩。母字梵經。大彌勒經意云。父是因緣有人主之德。故言修梵

摩。此云善德。亦云善淨。母名

梵摩拔提。此云德主。亦云淨主

也。賢劫經云。子曰德力。多聞

侍者曰海氏。智慧弟子慧光。神

通弟子曰堅精進。仏在世時。人

劫後。更十二劫空過無仏。後有

一仏名淨光補王。壽十小劫即是

利共興一大寺弘法也。師子仏光

星宿劫中第一日光仏也。翻名有

後枳迦法盡獨覺行化。與諸經不

同。人命轉促。正法之時人壽不

減。像末法中人壽便減至三三十

歲。有飢饉疫病刀兵次起。人多

死盡。國界空疎。仙人相誠人懷其

善。子年倍父漸漸長壽至八万四

千歲。從增六万歲至增八万。皆

有転輪聖王相次而出。八万歲時

王名儀法。彌勒方出。然論枳云。

劫減仏興。劫增転輪王出。以此

撫。彌勒八万四千劫初減方出。

厭生死故人壽百歲慈氏生天。人

壽八万四千方始下生成仏。當人

間五十六億七千万歲。以此而推

劫減時長。劫增時短。慈氏光照

四十里。梵志經云。父名梵手母

名梵經。子曰德力侍者曰海氏。

智慧弟子曰慧光。神足弟子曰賢

精進。正法八万歲收仏舍利。共

興一大塔寺。賢劫經云從迦諾迦

付陀仏。至第九百九十九仏。共

出一大劫。第一千樓至仏獨出一

劫後。更十二劫空過無仏。後有

一仏名淨光補王。壽十小劫即是

照四十里。君子種父名舅師子。母名江音。子名大力。多聞侍者名善樂。神足弟子名雨氏。智慧弟子名智積。仏在世時。人壽七萬歲。三會說法。正法億歲。舍利流八方上下也。從拘樓秦仏。至九十九仏。共出前半劫。後樓至如來。獨用半劫。樓至仏滅後。更六十二劫中。空過無有仏出世。過爾與後。第六十三劫中。有一仏。號為淨光稱王如來。出世壽命十小劫。化衆生。過此仏後。復三百劫。空無有仏出也。此雖有千仏。前後合言三千仏也。問樓至如來。何以獨用半劫耶。答應是隨機緣應如數耳。

問此何故賢劫中有千仏耶。答金力士經云。昔有転輪王出世。有千子具足。諸王子各發菩提心。願求作仏。父聖王欲識。此千王子。雖前作仏。題取千王子名。對王子。以香汁洗之。令千王採取算。得第一者最初仏。如是至九百九王子。最後一王子。一名字第千仏。諸王子譏言。我成仏世界無邊衆生無數。諸兄所度何

異體即一仏。過此以後三百劫中空過無仏。

化已盡。汝復作何所處度。小王子聞此語。悲泣。復更思惟。世界無邊。衆生無盡。我今發願。願我作仏時。我在世界衆生寿命。具與諸王子等所度衆生數亦同。於是地六種動。仏即與其授記。以是因緣故。最後一仏。獨當半劫也。以泣涕故。名為啼泣仏。啼泣標仏。樓至者此啼泣。亦云光明。仏生時有勝光明故。於是諸王子。即發願。王子作仏時。我等金剛護樓至仏。但金剛護。此是五性執金剛護。此是五性中促金剛神護也。

(同二七六中一下)

能盡也。願我作仏度人壽命一等諸兄。岌然地動仏即咸記。由是因緣故後一仏獨出一劫。以啼泣故盧支者此翻云父愛。父小子偏所愛念故為名也。於是諸兄願作故名啼泣仏。和上解云。胡盧支

古德或說。此經為小乘。從阿含¹藏教。此經理因是小乘教。若如大弥勒經別說。未必是阿含中出也。又一云是大乘經故。中阿含復是大乘。即此經文中。有常樂等語。³今謂不然。汝既言阿含經復是大乘等者。非正宗傍明大乘也。故今謂上生經是正是大教。故經文多具明六度四等菩薩行善

提心無上道也。(同二六九上)

以上の対照に依り、慈恩は本經の大要を説明するのに、「遊意」の綱格を参考として、自己の解釈を展開したことが明らかに感取されるであろう。特に經典の諸説を引証する場合には示唆を得たであろうし、古德とか古人とかの呼び方で述べる旧來の説なども「遊意」と合致しており、「遊意」に負つたものではなかつたかと推察される。恐らく當時としては参考に値する註疏はなく、綱要を述べたものとしては「遊意」が唯一のものではなかつたかと想像される。隋唐代は阿彌陀淨土の信仰が圧倒的であり、玄奘の帰國により弥勒信仰が再び盛んになるという時代的推移の過程にあり、慈恩の疏は、その指導的役割を果して いるからである。また博学な慈恩でさえも、その解釈において苦労した面が存するからである。³¹⁾ それは『弥勒上生經』自身に難点が存する故でもあるが、先人の註釈書が無かつたことにも依るであろう。

2 『三論玄義檢幽集』における引用

中觀澄禪の『檢幽集』は、弘安三年（一二八〇）の撰であるが、吉藏の『三論玄義』を豊富な經論引用を以て註釈したものであり、またその裏書は資料的価値を有し、古來權威あるものとして認められている。しかるに裏書においては慧均の『四論玄義』を、吉藏の著作と共に多く引用しており、當時の伝承の確かさを示しているのであるが、この裏書において

「惠均師弥勒經遊意云」として本書の一文を引用しているのである。わたしの見た限りでは一ヶ所であるが、それは『三論玄義』において、上座大衆二部の分裂を述べるに際し摩訶提婆の五事を説明する文中の天魔女³³⁾に対する注である。次に対照する。

弥兜經遊意

檢幽集卷五

第七魔波旬天者事。魔天宮。在欲色二天中間住也。魔者譬如石磨魔。破壞仏弟子。恐德也。宮縱廣六十由旬。城塹七重。廣嚴猶如第六天也。又有十法。一飛去無限數。二飛來無限數。三去無礙。四來無礙。五天無身皮膚骨然筋脈血。六無身之有不淨大小便利。

（大正七〇・四五七c）

小便利。七身無疲極。（以下略）
(大正三八・二七一c)

『檢幽集』は西紀一二八〇年の成立であり、一〇九四年撰の『東域傳灯目録』に慧均の遊意を記しているわけであるから、南都における慧均本の確かな伝承を知ると共に、この引用に依る限り、現行の遊意は吉藏の著ではないということになろう。少なくとも南都においては、慧均の著として伝えられ依用されていたことを証する。

八 結語

吉藏にすれば『弥勒經』は、すでに『觀無量壽經疏』の解釈を見たごとくに、小乘の範疇に入るのですが、しかし大乗は、小乗をも包括した総合性を有するが故に、しかも『觀無量壽經』は十方の仏化を明し、『弥勒經』は三世の仏化を明すわけであるから、両經を並び宣説することによって始めて大乗の趣旨が徹底されることになる。その意味から、吉藏は『弥勒經』に対しても註釈を加え、その概要を遊意として著したであろうことが推察され、目録にも記載されている通りである。したがつて、吉藏が本經を小乗と判ずるが故に、それに対する註釈が無かつた、あるいは必要がなかつたとは言えず、むしろ阿弥陀淨土を明す上は、弥勒成仏も明す必要性があつたと考えられる。ただ吉藏の場合は、大乗の主旨徹底を、一經の中に求めるのではなく両經の上に、大局的に把握して展開させようとする姿勢であろうと思われ、この点が「遊意」の構想、主旨とは大きな相違である。

吉藏の著作との比較及び慧均の学風を考慮して、一二の問題につき考察を加えたのであるが、経名の音写語、中仮の強調、仏滅等の年代論及び撰述年時の推定、用語の特質等につき、明らかに吉藏の撰とした場合に矛盾が存するであろう。しかも、それらは慧均の著作とした場合に誣証となる事項の

みである。あるいは意図的にという批判が加えられるかも知れぬ。しかし吉藏のものと断定する理由は見当らない。

仏滅後千二百四十年との記述から、本書の成立を西紀六三年と推定したが、これまでの慧均に関する考察の結果からしても、年代的な矛盾はなく、客観的を見て、玄奘の帰国（六四五）の十数年前に当り、したがつてその影響も見られぬし、慈恩の依用も何ら不思議はない。當時三論の学者も多数存在しており、慧均の『四論玄義』は識語によると顯慶三年（六五八）に大皇帝に奉呈されたとされるから、弥勒信仰の再燃するに及び、対外的にもその存在が認められていたことが推察される。本書を慧均の著とした場合、『四論玄義』の記述³⁴から推して、彼の晩年の作であろうと思われる。

恐らく、本書が吉藏撰とされるに至つたのは、南都における伝承の混乱ではなく、江戸時代の書写伝持の間か、あるいは続蔵經の原本にも大正蔵經で校合した大谷大学所蔵の写本等にも、内題に撰者名は記されていないようであり、筆録者が続蔵編纂の際の判断に由来するのではなかろうかと思われる。写本³⁵の検討については後日に期したい。

(1) 大日本続蔵經第一輯第三十五卷第四冊及び大正蔵經第三十
八卷所収。

(2) 撰名が記されていないのは他に『大品遊意』がある。ただし元來付されているものと、筆録者、編者が押入したものと

ある。

(3) 大正藏經の脚註によると、大谷大学藏写本は、惠均僧正となつてゐる。

(4) 『出三藏記集』卷二（大正五五・八中）

(5) 『觀弥勒上生經』のみ單訳で異訳經は伝えられていない。

竺法護訳『觀弥勒下生經』、羅什訳『弥勒下生經』『弥勒成仏經』、沮渠京声訳『觀弥勒上生經』、義淨訳『弥勒下生成仏經』、失訳『弥勒來時經』を一般に弥勒菩薩六部經とする。

他にも異訳あるいは疑偽經がある。

(6) 『高僧伝』卷五道安伝（大正五〇・三五三中）、竺僧輔伝

(同三五五中)、曇戒伝（同三五六下）参照。

(7) 『法苑珠林』卷十六（大正五三・四〇七中）

(8) 『高僧伝』卷八（大正五〇・三八一下）

(9) 『続高僧伝』卷五僧旻伝（同四六三中）、卷八法上伝（四

八五下）、曇衍伝（四八七中）、『高僧伝』卷十三僧護伝（四五二上）参照。

(10) 『続高僧伝』卷九靈裕伝（同四九七下）、卷十二靈幹伝（五一八下）、善胄伝（五一九下）

(11) 『天台宗章疏』（大正五五・一一三六下）

(12) 『觀無量壽經疏』（大正三七・一二三三下）

(13) 「胡云阿耶羅此云觀。觀是觀見亦是觀行亦是觀察」（同二三四上）

(14) 月輪賢隆『仏典の批判的研究』（昭和四十六年十一月、百華苑）四五頁以下参照。また「説」に当る般遮又は槃遮につ

いても相当する原語は不明である。

(15) 澄禪『三論玄義檢幽集』卷六（大正七〇・四七五上）所引の成壞義の文。

(16) 憲興『弥勒上生經疏』（大正三八・三〇五中）

(17) 吉藏『金光明經疏』（大正三九・一六〇中）

(18) 澄禪『檢幽集』卷三（大正七〇・四一七下）及び卷五（同四四一中）。闍那迦は janaka（産出する、生む）で、毘留は

virūḍha であろう。

(19) 「仏陀此云覺者知者見者等也。三藏云清淨覺也。修多羅亦

云修姤路、修吒羅、修林嵐、異名有四。三藏云修多闡多舍五異名也」（大正三八・二六三上下）

(20) 『出三藏記集』卷九「荊州隱士劉虬作無量義經序」（大正五五・六八上）及び慧遠『大乘義章』卷一（大正四四・四六五上）等参照。

(21) 吉藏『三論玄義』（大正四五・八中以下）参照。

(22) 『法華玄論』卷三（大正三四・三八二中）

(23) 『法華遊意』（同六四三下）

(24) 『大品遊意』（大正三三・六六中）

(25) 費長房『歷代三寶紀』卷一（大正四九・二三上下）の説を

まとめると、周莊王十年仲春二月八日出生（西紀前六八七）、惠王八年四月八日出家（同六六九年、十九才）、同十九年二月八日成道（同六五八年、三十才）、匡王四年二月十五日入滅（同六〇九年、七十九才）となる。

(26) 平井俊栄「吉藏著『大般涅槃經疏』逸文の研究」（南都仏華苑）

教第二十七号、二十九号、昭和四十六年・四十七年）参照。

(27) 安澄『中觀論疏記』卷二末（大正六五・四七中以下）

(28) 吉藏『中觀論疏』卷一末（大正四二・一七中以下）参照。

(29) 伊藤「大乘四論玄義の構成と基本的立場」（本論集第二号、昭和四十七年三月）

(30) 吉津宜英「地論師という呼称について」（駒沢大学仏教学部研究紀要第三十一号、昭和四十八年三月）。なお伊藤「慧均『大乘四論玄義』について（二）」（印度学仏教学研究第二十卷第二号、昭和四十七年三月）参照。

(31) 一例を上げれば、先述の「観」の梵音については何も触れぬし、したがって原語による正確な意味が把握されず説明も「心勤妙境欣趣日觀」とするのみである。また「海此岸旃檀香」の説明も、「海此岸香六鉢仙、直娑婆世界」として、如何なる香であるかの説明はない。月輪前掲書一三三頁以下参照。

(32) 月輪前掲書では經典内の矛盾を指摘し本經を中國偽撰ではないかとする。

(33) 『三論玄義』（大正四五・八中）「此偈有五事。一余人染汚衣者、提婆不淨出汚衣、而誑弟子言、我是阿羅漢、實無不淨、但是天魔女以不淨污羅漢衣、故云余人染汚衣」

(34) 慧均『大乘四論玄義』卷一、初章中仮義に「興皇師大建六年（五七四）五月房内亦開六章、一破異明中、二成仮不成仮明中云云」とあるに依る。現行本は卷一は欠本であるが、資料は大谷大学三桐慈海氏の提供に負う。

(35) 写本は大谷大、高野山大、京大の三本がある。